

人とのつながり

雲雀丘学園高等学校 一年 丹野 叶翔

私は脳性麻痺という障碍を抱えている。左手と左脚が人よりも動かしずらく、子どもの頃からリハビリを重ねて、少しずつできることは増えていったものの、今でも不自由と感じる場面はある。そんなときに感じるのは、「障碍のある自分にとって大切なのは人とのつながりなのだ」ということだ。

私がそう強く思うようになったのは、日常の小さな出来事の蓄積からだ。小・中学校で私はクラスが始まると、最初の段階でみんなに伝えるようにしていた。しかし、「伝えるのが嫌だな」と感じた時はほとんどない。私がこのことを伝えると「困ったときは手伝うよ」などと声をかけてくれるからだ。そのような言葉で胸の重さがすっと軽くなり、「できないことがあっても別に大丈夫なんだ」と安心できた。リハビリでも、先生や両親の励ましで、うまくできないことでも挑戦しようと思えた。私にとって、こうした人の温かさはどんな設備よりも力強い支えになった。

もちろん、社会には段差やバリアフリーの取り組みも必要

だ。しかし、どれだけ便利な設備が整っていても、もし周りの人が障害を理解せず、冷たい態度をとったら、障害者は孤独を感じてしまうだろう。反対に、たとえ全く知らない場所であっても、困っているときに声をかけてくれる人がいれば、安心して前を向くことができる。障害者にとっての幸せとは、設備の充実だけでなく、人と人とのつながりの中で生まれていくものだ。

現代社会では、障害者に対して「特別な人」という距離がある見方がまだ残っていると感じる。私のように見た目ではわかりにくい障害もあるため、誤解されることもある。しかし本来、大切なのは、「違いを分け隔てること」ではなく「違いを認め合うこと」だと思う。

そのためには、私たち一人ひとりが「人と人とのつながり」を意識して行動することが大切だ。困っている人に手を貸す、相手の立場になって考える、こうした小さな行動の積み重ねで、障害者も安心して暮らせる社会が実現する。制度や設備の改善も重要だが、それを動かすのは結局「人の心」が動いている。

私は自分の障害を通して、「人の温かさ」に支えられて生きてきた。そして、障害者の幸せは「できないことがなくなること」ではなく、「人とのつながりのなかで安心して生きられること」だと実感している。

誰もが互いの違いを認め合い、温かい気持ちを分かち合える社会こそ、障害者にとって、そしてすべての人にとって「幸せ」な社会だと私は思う。